

生いたちの記・墓参り

福島 みゆき

生いたちの記

小学校のときの恩師、角井節子先生の一周忌が間もなくやってくる。私は今、先生の「生いたちの記」をまとめるために連日奮闘しているところだ。

北陸の小さな港町で私は小学生になった。担任となった角井先生とは、父の転勤のため三年生の一学期でお別れしたのだが、その後も文通が続き、先生の死の直前まで濃密な交流があった。多くの教え子のひとりに過ぎないのに、なぜか先生は私のことをずっと深く支え続けてくださった。

亡くなられる五、六年前突然、先生からご自身の「生いたちの記」の原稿が送られてきたときはとても驚いた。息子さんに託そうとしたら断られたとのこと。

先生の複雑な出生については少ししか知らなかった。頭脳明晰、抜群の記憶力、そして清楚な美しさ。私は先生に夢中だった。先生にとことんついて行こうと思っていた。

だから、本当のお父さんは超一流の人物に違

いないと思いついていた。事情あつて離別し、数奇な人生をおくられてきたのであろうと思像していた。

先生は誰かに自分の出生のことを語っておきたかったようだ。でも、公にするつもりはなかったと思われた。

私は悩んだ。私ひとりで先生の一生を胸にしまい込むことの重さに耐えきれないような気がした。むしろ先生の偉大さ、素晴らしさをひとりでも多くの人に伝えたいと思った。

意を決して、プライバシーに充分留意して本にすることにした。ご遺族の了解が得られたら、関係者だけにでも読んでもらいたかった。

そのための「見本」の冊子を手作りすることにした。同級生たちにも情報提供など協力してもらった。そして、やっと完成寸前までできた。不器用なので悪戦苦闘の連続だった。

息子さんは快く承諾してくれるだろうか？もし、「困ります」と言われたら「幻の書」になってしまう。

ちなみに、先生の出生に関しては私の想像は大きくはずれていたが、複雑で苦難続きであつ

たことにはわりはなかった。なぜそんな境遇を経て、あんなに一生懸命、慈愛に満ちた教育を実践することができたのであろう？

これから、祈る気持ちで「生いたちの記」を息子さんに送ります！

(二〇二二年十一月二十一日)



先生の本「生いたちの記」を手にして Photo©福島みゆき

墓参り

十二月四日、念願の角井節子先生の墓参りを
するために、富山に行ってきた。先生は小学校
のときの恩師である。亡くなられる直前まで濃
密な交流が続いた。教え子として終生変わらぬ
心のこもったまなざしで見守ってもらった。私
は何としても先生の葬儀に駆けつけたかった
が、コロナのため果たせなかった。せめて一周
忌には墓参りしたかった。

私はその日のために先生の「生いたちの記」
を本にまとめた。息子さんの了解を得てから当
日の参加者分を用意して持っていた。

当日は曇りが降ったりやんだりの変わりやす
い天気だった。墓に大きな虹がかかった。なん
とそれがお墓から出ているように見えたので、
みんなで「先生が喜んでいる！」と言いつつあ
った。一周忌法要はすでにご家族で終えられてい
たので、墓参りのあと、教え子たちだけで空き
家になっている先生の家に行った。折詰と女子
がつくってきた汁と漬物で先生の思い出を語
りあった。お酒はなしだった。

私は作ってきた本を配った。みんなは先生の
複雑な生いたちについてあまり関心を持って
いないようだったが、たいへんな苦勞をされて

いることを知り、驚いていた。

同級生の多くは先生の家の近くに住んでい
るので、一人暮らしの先生のお世話をよくして
いたらしい。墓参りする人も絶えないとのこと
毎月、月命日に必ずお参りして、掃除している
人もいる。いちばん先生を困らせた人だ。彼は
とても熱心にクラス会のお世話をしてくれて
いる。「先生が自分の生きる支えだった」と言
っていた。そんな人が多い。

私の平凡な人生も、先生のおかげで、かけが
えのない素晴らしいものになった。いくら感謝
しても足りない。

先生、ありがとうございます！ 先生と出
逢えて幸せでした。来世でも、またお会いした
いです。

私はあつい気持ちを胸に、山口に帰ってきた。

(二〇二一年十二月六日)



墓参り 虹がみえる！ Photo©福島みゆき